

医学部保健学科における教養教育・全学教育と専門教育の現状と課題

九州大学医学部保健学科看護学専攻 大池美也子

I はじめに

少子高齢社会の到来、高度医療の進展、介護・福祉分野の拡大など、保健・医療・福祉をとりまく社会状況は急激に変化している。それとともに、保健・医療・福祉に対する人々のニーズも高まっており、医療系教育機関には、社会の要請に対応できる確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い人材の育成が期待されている。

九州大学医学部保健学科はそのような教育機関の一つであり、教育課程は、医療に関わる人材の養成課程（看護師、保健師、助産師、臨床検査技師、診療放射線技師）によって構成されている。各専門領域を特徴とした教育内容が展開されているが、医療技術の進歩に伴い、新たな知識や技術が高度化と専門化することによって、教育課程に占める専門領域の割合が広がってきている。それとともに、社会の変化に対応できる問題解決能力や状況判断能力などもこのような教育機関の課題ともなっている。

このようななかで、2005年の国立大学協会調査「国立大学法人における教養教育に関する実態調査」あるいは「看護学教育の在り方に関する検討会」（2004）では、教育課程における専門教育の割合が広がる一方、教養教育の後退化が指摘されている。これは、専門教育の強化を意味するものであるが、教養教育の不足によって、学士課程における多角的視点に基づく思考能力や幅広い素養を身につける機会が失われているのではないかという懸念も取り上げられている。

専門教育と教養教育にはさまざまな議論があるが（2002年中教審答申）、近年では教養教育の捉え方も変わりつつあり、むしろ時代に応じた教養教育あるいは生涯教育としての教養教育のあり方も検討されてきている。そのなかで、保健学科は、医療に関わる人材の育成であり、豊かな人間性や生命への深い畏敬の念あるいはコミュニケーション能力などに関わる全ての教育課程を見据えたうえで、教養教育と関わる専門教育を構築していくことが不可欠といえる。このため、学士課程という短い期間のなかで、医療者の育成に向けた教育の在り方や方法について、教養教育を含めた全学教育全体の観点から検討していく必要がある。そこで、本稿では、当保健学科の教育課程や授業評価を踏まえながら、医療職者の育成に向けた教養教育・全学教育と保健学科における専門教育との繋がりや方向性について考察することを目的とする。

II 保健学科の教育課程

ここでは、医療に関わる人材育成を目指す当保健学科の教育課程を示す。

1. 保健学科の教育目標・目的

九州大学医学部保健学科は、看護学専攻、検査技術科学専攻、放射線技術科学専攻、という3つの専攻によって構成される。保健学科の基本理念は、「広い知識と深い人間理解を基盤とし、人の

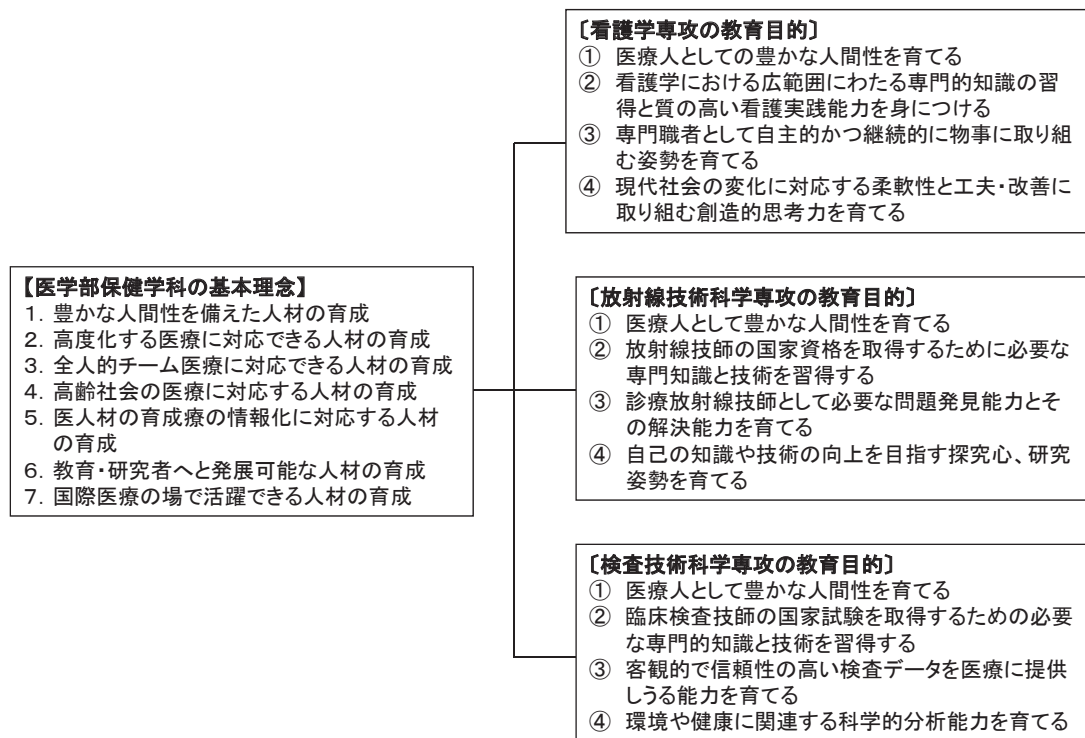


図1 保健学科における教育目標・目的

健康と幸せに貢献する人材を育成する」ことであり、図1に示す教育目標を掲げる。

人を対象とした専門領域である三専攻に共通する教育目的は、「豊かな人間性を育てる」ことである。それとともに、各専門領域における知識と技術を学んだ後、それぞれの資格に向けた受験資格を得ることが目的に含まれている。各専門領域における職業人として、将来の教育者・研究者であることも期待され、探究心や創造的思考力あるいは科学的分析能力を身につけていくことも含まれている。

2. 保健学教育の各専門領域における教育課程と教養教育

保健学科は前述したように各専門領域における資格取得を目指す。看護学専攻では看護師と保健師、放射線技術科学専攻では診療放射線技師、検査技術科学専攻では臨床検査技師が、それぞれの受験資格の単位が必修となっている。また、看護学専攻の助産師の受験資格の単位については選択としている。教育課程は資格取得に関わる専門性の高い教育内容によって構成され、将来の研究者・教育者としての思考能力の育成を目指して卒業研究が四年次に設定されている。また、臨床の場から直接学ぶ実習が各専門領域において行なわれている。それぞれの専門領域における実習方法などは異なっているものの、実習は専門領域における学習方法の一つでもある。このような卒業研究や実習はいずれも専門の教育課程を習得することを目指すものであるが、専門性を発展させていく分析・統合能力あるいは対人関係能力などの育成とも関わる。

表1 看護教育に関する指定規則

教育課程	指定規則	看護師課程										保健師課程			助産師課程								
		基礎分野		専門基礎分野		専門分野						地域看護学概論	地域看護学活動	保健福祉行政	地域看護学実習	基礎助産学	助産診断・技術学	地域母子保健	助産学管理	助産学実習			
		科学的思考の基礎	人間と人間の生活の理解	人体の構造と機能	疾病の成り立ちと回復の促進	社会保障制度と生活者の健康	基礎看護学	在宅看護学	成人看護学	老年看護学	小児看護学										母性看護学	精神看護学	臨地実習
												基礎看護学	在宅看護学	成人看護学	老年看護学	小児看護学	母性看護学	精神看護学	計	計			計
大区分	小区分	13	21	36						23			93	18	3	21	14	8	22				
全学教育科目	教養教育科目	共通コア科目																					
		コアセミナー																					
		文系コア科目																					
		理系コア科目																					
		少人数セミナー																					
		総合科目																					
		言語基礎科目																					
		健康・スポーツ科学科目																					
		共通基礎科目																					
	個別基礎科目																						
情報処理科目																							
保健学専攻教育科目	保健学科医療系基礎科目	生体のしくみ																					
		健康と医療																					
		社会・文化・環境																					
		情報																					
	看護学専攻専門教育科目	専門基礎科目	看護専門基礎科目																				
			基礎看護学																				
		専門科目	臨床看護学																				
			小児看護学																				
			母性看護学																				
			助産学																				
			精神看護学																				
			地域看護学																				
総合領域																							

注) 本表は、平成19年以前の指定規則に基づく

保健学科各専攻の教育課程は、大学教育であるものの、資格取得の関係から学校養成所指定規則による編成が関与している。この学校養成所指定規則による対比表では、基礎分野、専門基礎分野、専門分野によって教育課程が区別され、そのなかで、基礎分野は教養教育に該当する。表1に看護教育の例を示す。この基礎分野は、専門分野を学ぶための幅広い素養を養う基礎として位置づけられており、次のような能力の育成に貢献することが期待されている。科学的思考や論理的思考を基盤として問題を解決できる能力を深め、豊かな人間観に基づいて看護の対象である人々を洞察、理解する力を身につけることであり、それらが専門教育と乖離せずに繋がっていくことが求められる。この基礎分野の単位は、看護学専攻では＜科学的思考の基盤＞と＜人間と人間の生活の理解＞という二つの側面として13単位、放射線技術科学専攻と検査技術科学専攻では＜科学思考の基盤＞＜人間と生活＞として14単位が表記されており、指定規則の93単位全体に占める割合は13～14%となる。

教養教育を意味する基礎分野は、看護教育に関していえば、看護実践能力と関連づけた検討やその割合が指摘されている。平成16年看護学教育の在り方に関する検討会による「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告によると、看護学教育は教養教育を基盤として構成されることや看護実践能力に関わることを示されている。教養教育には、幅広い人間理解、職業人と

しての役割遂行、他の学問領域の学びを通じた看護実践の改革、看護学の発展への寄与、などが期待されている。しかし、同報告では、平成14年度において調査した結果から、約7割の大学が卒業要件の20%、あるいはそれ以上の単位数を教養教育に当てているものの、教養教育の在り方については、「高学年次に移行させたい」、「学科ごとの意見の違い」、「キャンパスの移動にかかる時間・経済的問題」、「カリキュラム全体の見直し」、「他大学・放送大学での履修」、「開設科目数の増加」、「学生の基礎学力低下など」が看護系大学の課題としてあげられていた。これらは、専門教育と教養教育をどのように繋げていくかという当保健学科に関わる課題でもある。

3. 教養教育・全学教育から専門教育への移行

保健学科の学生は、入学時より医療に関わることが期待されているため、他学部のように入学後にコースの選択などを設定していない。成績評価による進級条件が専門教育への一つの節目となっているといえよう。

将来の医療人となる学生が専門教育に向けた学習にとまどわないように進めていくために、その専門教育への円滑な移行をなす媒介として、次の二つを取り上げることができる。

一つは、前述したように、保健学科の教育課程は基礎分野、専門基礎分野、専門分野によって構成される。学生は基礎分野となる教養課程を学習するが、同じ時期に専門基礎分野が開始されている。この専門基礎科目としての導入科目は、三専攻に共通する「解剖学」や「生理学」があるとともに、「看護学概論」などの各専門領域を学習する上での基礎科目も行われている。これらの科目群は、2年次以降における専門教育の基礎を学習することを目的とするが、これから各専門領域に進むという医療に関わる者としての自覚につながるものといえる。

二つ目は、各部局が担当しているコアセミナーである。保健学科では、各専門領域の教員が担当し、専門性を基盤とした考え方や少人数制による交流が行なわれている。保健学科の専門領域の一部を見ることによって、将来の職業選択を検討する機会ともなりうる。将来の医療に関わる学生にとって、このようなセミナーは、全学教育の教養課程から専門課程への橋渡しの役割を担っているといえる。

III 保健学科の教育課程に関する授業評価

ここでは、保健学科の教育課程の現状を捉えるために、全学教育課程を含む授業評価などを資料として取り上げる。

1. 全学教育課程の授業評価

表2は、平成19年度前期における全学教育課程の授業評価の一部である。各科目の調査回収率が異なるため、一概に判断はできないが、全学教育における学生の評価の目安として捉えておきたい。

これをみると、全学教育は総合的に〔E1 新たな知識の獲得〕としては高く評価されている。少人数セミナーは、〔E4 思考力のトレーニング〕、〔E9 教師と学生間の双方向性〕、〔E16 物事を自分なりに捉え直す〕、〔E13 自ら調べ直そうとする態度〕などが、他の科目群よりも高く評価されていた。全学教育の授業は学生参加型よりも知識伝達型にあり、少人数セミナーは学生が能動的に授業に取

表2 平成19年度前期全学教育授業評価（一部）

	回収数	E1	E12	E2	E3	E4	E7	E6	E10	E9	E16	E8	E18	E13	E15	E11	E19	E14	E5	E17
		新たな知識の獲得	教師の熱意	一緒に学ぶ仲間がいる	授業内容と構成の適切性	思考力のトレーニング	実生活や現実問題への運動	授業の周知準備	学ぶことの充実感	教師と学生間に双方向性	物事を自分なりに捉え直す	よい成績を目指して学ぶ	学習や研究への関心	自ら調べたいという態度	教師の学び続けている姿勢	同じ意見や目的をもつ友人	将来の仕事や就職への興味	ライバルがいることへの認識	自分の能力への自信	自分の能力に認められる経験
全体	27180	55.6	21.1	17.6	17.6	17.2	14.9	13.7	11.1	10.1	10.7	11.8	9.2	8.7	9.1	5.6	3.4	3.5	2.8	1.6
教養教育科目	19010	55.4	22.8	18.9	18.9	15.3	18.5	14.5	12	12.3	11.3	11.2	9.5	7.6	9.8	5.8	3.6	3.4	3	1.8
共通コア科目	1545	41.4	11.5	6.5	5.4	14	18.9	10	4.5	0.6	18.3	1.9	6.9	9.8	8.2	3	1.3	0.3	0.8	0.4
コアセミナー	1118	63.3	14.6	42.2	14	31.7	19.1	13.1	17.3	27.8	27.5	3.5	41.7	29.2	11.6	15.6	20.6	4.4	2.6	3.4
文系コア科目	3083	60.5	24.4	13.3	16.5	16.1	22.9	16	11.2	6.9	21.6	3.7	12.8	5.7	16.3	7.2	3.9	1.4	1	1
理系コア科目	2379	69.6	20.4	9.8	15.9	11.3	22.7	19.1	11.7	5.5	10	5	16.1	6.5	16	3.7	4.2	1.1	1.8	0.8
少人数セミナー	271	61.6	33.6	40.2	25.5	43.2	32.8	18.8	22.5	42.4	42.8	4.8	22.9	22.5	23.2	22.9	12.9	6.6	5.5	7.4
総合科目	759	67.2	18.7	12.5	24.8	13	41.5	24.4	16.9	6.7	26.7	2.8	21.5	12	14	5.9	13.8	0.8	2.1	1.2
高年次教養科目	540	62	20.7	7	21.7	12.6	28.5	19.6	10.9	5.9	18.9	1.7	15.4	5.2	6.7	3.5	7.8	1.9	0.7	0.2
言語文化科目	8290	57.3	25.7	20.5	22.5	18.9	10.4	12.8	13.8	17.9	4.8	20.3	6.7	8.7	6.3	5.3	2.9	4.1	3.3	2
言語文化基礎科目	8041	56.8	25.2	20	22.1	18.6	9.8	12.5	13.3	17	4.7	20.6	6.4	8.6	6.3	5	2.6	3.9	3.3	2
言語基礎文化科目（英語）	4943	44.4	21.2	18.6	18.2	23.3	9.9	9.6	8.4	16.5	5.6	16.9	5.2	7.5	5.6	4.6	2.4	3.5	3.6	2.2
言語基礎文化科目（ドイツ語）	1100	71.4	25.2	18.4	28.1	15.6	6.1	13.6	17.9	11.4	3.6	26.1	6.7	14.4	6.2	5.6	1.5	3.1	2	1.3
言語基礎文化科目（フランス語）	332	78	25.3	20.8	24.1	9	10.5	10.8	20.8	17.5	3	16.9	9.9	12.7	7.2	6	6.6	3.6	2.7	1.8
言語基礎文化科目（中国語）	836	78.5	38	26.2	33.3	7.9	11.8	17.6	24.2	25	3.7	33.9	9.2	7.7	9.3	5.5	3.3	7.4	3.1	2
言語基礎文化科目（韓国語）	472	78.6	30.1	20.3	18.2	6.1	12.3	21	16.7	14	0.6	30.5	6.6	4.2	4.4	4.2	0.8	4.4	1.7	0.6
言語基礎文化科目（スペイン語）	301	83.4	43.2	27.6	31.2	11.6	8.6	26.2	30.2	20.6	4	11.3	9.6	8.6	9.3	6.3	3.7	4.3	2	1.7
健康・スポーツ科学科目	2143	28.3	20.5	42.4	17.9	3.9	26.6	11.4	9	14.6	6.4	6.2	2.5	2.9	5.9	8.2	1.1	9.4	8.3	3.7
文系基礎科目	482	62.9	21.4	5.8	18.5	18.7	28.6	11.4	14.1	1.2	27.6	1.9	11.8	6.8	17.2	1.5	1.7	0.6	0.2	0
理系基礎科目	6607	54.6	17.9	14.6	14.5	22	3.6	11.8	8.3	5.1	8.7	14.7	8.5	11.4	7.4	5.8	2.8	3.8	2.2	1.1
理系共通科目	4977	52.7	15.9	13.8	13.4	20.5	2.7	10.6	7.5	3.8	8.2	14.7	7.7	11.5	6.8	5.5	1.8	3.4	1.8	0.8
理系個別基礎科目	1630	60.2	24	17	18	26.7	6.3	15.4	10.9	9.1	10.1	14.7	11.1	11.2	9.3	6.5	5.6	4.9	3.4	2.3
情報処理科目	807	70.8	6.9	19.7	11.3	19.2	14.3	12.8	9.4	3	5.5	8.1	5.3	12.5	0.9	4.2	3.7	2.1	4.2	1.2

注1) 九州大学全学教育学生による授業評価平成19年度前期のデータ（app.4~6を用いた）。
 注2) E1からE19は、授業を履修したことの意味をどんな点に見出すことができるかという質問であり、E20の他は省略した。
 注3) E1からE19の順番は%の占める割合が全体的に多い順番に入れた。

数値は%を示す

り組む学生参加型になっているともいえる。しかし、〔E13 自ら調べ直そうとする態度〕に対する評価は全体的に低く、自主的な学習能力の不足が伺われた。また、コアセミナーでは、〔E2 一緒に学ぶ仲間がいる〕、〔E18 学問や研究への関心〕、〔E19 将来の仕事や就職への興味〕で他の科目群よりも高く評価されていた。

2. 教養教育・全学教育への保健学科学生の科目履修状況

表3に平成19年度における保健学科一年次学生の全学教育の科目履修状況をまとめた。

保健学科の学生は理系コア科目よりも文系コア科目の履修が多い傾向にあり、心理学、先史学、法学が履修されていた。総合科目でさまざまな科目を選択していたが、学生は幅広い人間理解を目指して科目を履修することよりも、人間理解に向けて学ぶという目的のために履修していることが伺われた。また、教育学や社会学では三専攻の学生で異なる履修傾向にあった。理系コア科目においては、生物科学や健康科学などを履修しており、医療・保健関係の専門領域に関わる科目を選択する傾向があった。これらから、保健学科学生は、専門教育との関係からの科目履修をしていることが推測された。

表3 平成19年度保健学科一年次学生の全学教育履修状況

区分・授業科目名		放射	検査	看護	計
共通コア科目(人間性・社会性) (4単位)		38	33	72	143
	コアセミナー (2単位)	38	33	72	143
文系コア科目 (4単位)	心理学	24	19	51	94
	先史学	15	9	25	49
	法学	4	16	18	38
	社会学	26	10	1	37
	教育学	1	5	25	31
	歴史の認識	2	8	15	25
	人文地理学	4	8	6	18
	経済学	8	6	2	16
	歴史と社会	6	1	8	15
	思想史	2	1	11	14
	哲学	11	2		13
	日本国憲法	1	2	8	11
	科学史	2		5	7
	文学	1	2	2	5
	芸術	2	2	1	5
	政治学		2	1	3
	古典の世界		1	1	2
文化人類学	1			1	
理系コア科目 (4単位)	生物科学Ⅰ	23	16	36	75
	健康科学Ⅰ	4	12	25	41
	生物科学Ⅱ	2	3	27	32
	健康科学Ⅱ	1	6	21	28
	地球科学Ⅱ	7	6	5	18
	地球科学Ⅲ	5	1	11	17
	化学Ⅱ	2	10	1	13
	健康科学Ⅲ			10	10
	図形科学Ⅰ	5		2	7
	物理学Ⅱ	6			6
	化学Ⅲ		1	5	6
	図形科学Ⅱ	3	1	1	5
	数学Ⅲ		2	2	4
	数学Ⅱ	2	1		3
	物理学Ⅲ	1	1	1	3
	生物科学Ⅲ		1		1
	情報科学Ⅰ		1		1
図形科学Ⅲ					
情報科学Ⅱ					
情報科学Ⅲ					
少人数セミナー			1	10	11
総合科目		35	28	71	134
言語文化基礎科目	英語	38	33	72	143
	ドイツ語	20	18	33	71
	韓国語	9	8	13	30
	中国語	9	3	15	27
	フランス語		3	5	8
健康・スポーツ科学科目 (2単位)	スペイン語		1	5	6
	健康・スポーツ科学演習	38	33	73	144
文系基礎科目					
理系基礎科目	共通基礎科目				
	自然科学総合実験	38	33	72	143
	細胞生物学	38	32	72	142
	有機物質化学		32	57	89
	線形代数(同演習)	38	21	19	78
	力学基礎・同演習	38	33		71
	微積分学・同演習	37	32		69
	電磁気学	37	1		38
	集団生物学		6	5	11
熱と波動論基礎		1		1	
情報処理科目 (1単位)	情報処理演習	23	33	13	69

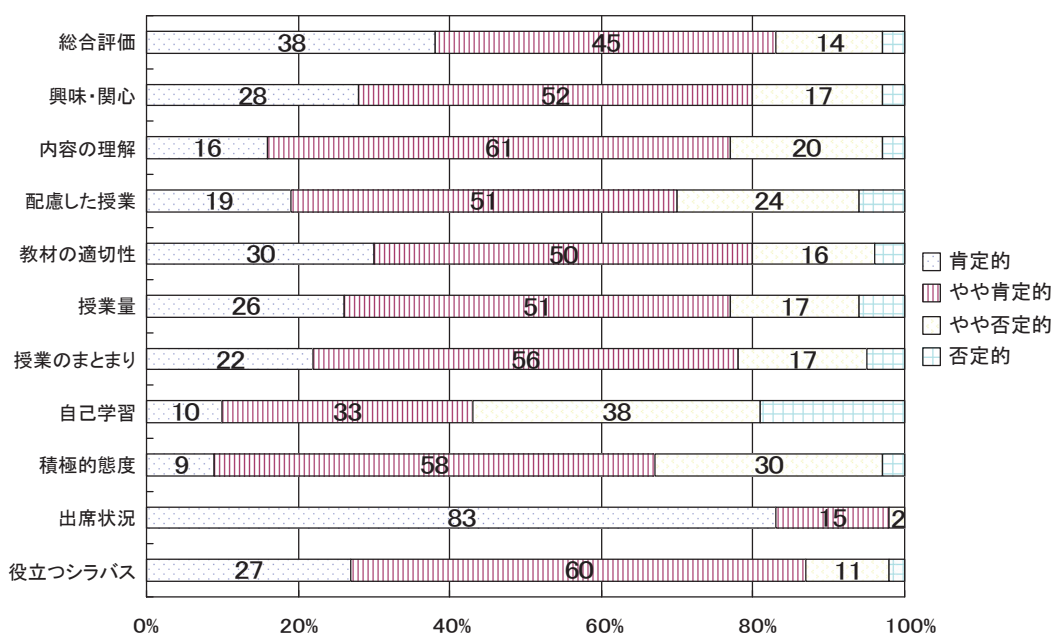


図2 保健学科における平成19年度授業評価

3. 保健学科専攻における学生の授業評価

ここでは、専門領域の教育課程に対する評価として、本保健学科の平成19年度授業評価を図2に示す。これは、全体的な授業評価であるため、学生が何を獲得したかは明確にすることはできないが、自己学習や積極性について高い評価を得ていなかった。この傾向は、平成19年度授業評価のみならず例年同じ傾向が続いていた。また、授業評価項目のなかで、総合評価や興味・関心に関する調査項目は、肯定的に評価しており、専門領域に関する学

生の学習は概ねよいといえる。また、専門教育の到達を示す国家試験の合格率は全国平均を上回っており、学生が目標とするそれぞれの資格取得については成果を挙げている（表4）。

保健学科全体の授業評価ではないが、図3に平成17年度第一回卒業生である保健学科看護学生（73名、回収率75%）を対象としたカリキュラムに対する評価を示した。評価項目は教育目標・目的に沿った内容であるが、豊かな人間性や生命への畏敬の念などに関する項目はやや高い評価となっていた。看護教育における実習や演習は、直接対象となる人と関わっていく機会があり、そのような体験から学ぶことがこの評価に繋がったものと考えられる。一方、科学的思考と判断力あるいは明確な目標に関する項目は低い評価であり、記憶の想起のみならず分析・統合する力の不足が伺われた。

表4 保健学科における国家試験合格率

	平成19年	平成20年
看護師	100 (90.6%)	100 (90.3%)
保健師	100 (99.0%)	97.5 (91.1%)
助産師	100 (94.3%)	100 (98.1%)
臨床検査技師	93.5 (75%)	97.1 (74%)
診療放射線技師	88.2 (76.5%)	83.7 (73.2%)

注) () 内の数値は全国の数値を示す

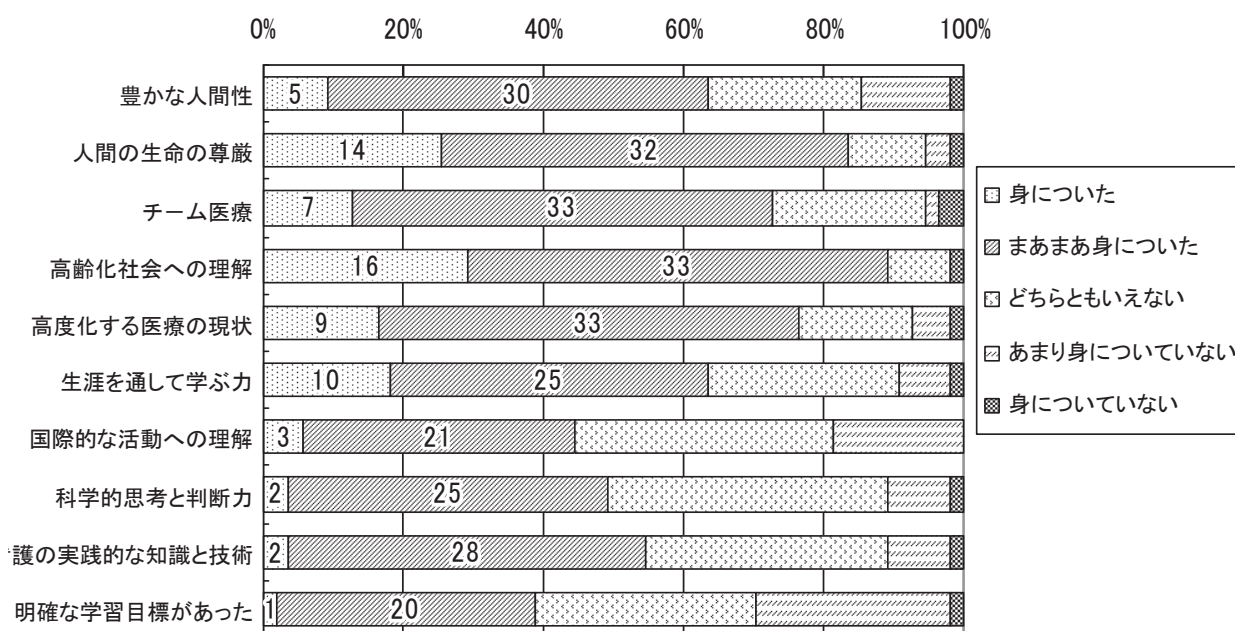


図3 平成17年度保健学科カリキュラム評価（看護学生を対象）

IV 教養教育・全学教育と専門教育を繋げていくために

教養教育・全学教育と専門教育との繋がりや方向性を把握するために、保健学科の教育課程といくつかの授業評価を資料として概観してきた。わずかな資料の提供に留まるものではあるが、以下のような点についてまとめる。

一つは、保健学科における教育の目標・目的は、教養教育・全学教育に関わる内容であるが、教育課程に専門教育が占める割合は大きくなっており、資格取得に向けた専門教育の成果に貢献していたことである。この資格取得は、学生の進路に影響するものであり、医療系教育機関が高い合格率を維持していくことは、避けられないものでもある。また、看護教育では、平成20年保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の改正によって、看護師教育については、看護実践能力の強化と看護職の教育内容の充実化を図るため、統合分野を新たに設け、4単位増の97単位以上（3年課程）、保健師教育は2単位増の23単位以上、助産師教育は1単位増の23単位以上になり、平成21年度の入学生から新カリキュラムが適用される。このような改正によって、医療系教育機関の教育課程は対応していかなければならず、大学教育のなかで保健学科の専門教育の質と量を調整していくことが常に課題にあるといえよう。

二つ目は、全学教育と保健学科の専門教育の授業評価で共通していた自主学習や能動的態度の低さであり、これらを学生の習得度の程度として認識しておくことである。生活体験の乏しさや受身的態度にある昨今の学生が、これらの能力を学士課程のなかで身につけていくことは容易なことではない。しかし、急激に変化する社会状況にあるからこそ、生涯にわたって主体的に学習し行動していくための原動力をどのように育成していくかは重要な教育的課題でもある。特に、医療の場で

はその安全性が何よりも優先され、自分が行う行為の意義や目的を常に把握しておかなければならない。医療の専門性に進んでいくからこそ、学ぶ姿勢や態度を確実に身につけることが期待される。このような能力の習得には、少ない人数による学生参加型が適しているが、全学教育のなかで、少人数セミナー形式による授業を常に展開できるものでもない。しかし、全学教育と保健学科の専門教育における共通課題を認識しながら、専門教育のなかでも積極的に少人数による学習活動を導入し、授業方法を工夫していくことが今後の教育実践において不可欠なものとする。

三つ目は、本稿では、授業評価を取り上げてきたが、専門教育と教養教育・全学教育との関係に関わる資料は見出せず、教員は自己の専門領域への関心に集中している傾向が伺われたことである。また、大学設置基準の大綱化後に関わる調査は行われていたが、個々の教師が、教養教育と専門教育との繋がりをどのように展開していくか具体的な対策についても見出すことができなかった。筆者は、教養教育・全学教育と専門教育を区別することなく、両者の有機的連携といわれる具体的な方法が教育課程を進める上において必要と考えている。例えば、看護基礎教育に関わる櫻井らは、教養教育を礎とする基本看護技術演習に取り組んでおり、教養教育が専門的知識獲得の基盤となることや学び方の支援に繋がるものと捉えていた（櫻井利江他，2007）。このため、教養教育に含まれる知見（読む、書くなど）と基礎看護技術の学習方法を取り入れた自己学習を展開していた。櫻井らによる方法は学生の蓄積してきた学習内容を認識しながら、専門教育を進めていくことであり、このような具体的方法が専門教育に関わる教員に必要ではないだろうか。

終わりに

前述の「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告のなかで示された「高学年次に移行させたい」、「学科ごとの意見の違い」、「キャンパスの移動にかかる時間・経済的問題」などの教養教育の在り方に関する課題は、当保健学科の抱える課題でもある。そのなかで、専門教育を進めていくには教養教育を単に専門教育の基礎として位置づけるのではなく、生涯学習発展の基盤づくりとして捉えなおすとともに、専門教育にどのような影響をもたらしているか常に問い直していくことが必要と考える。

引用・参考文献

国立大学協会調査，2005「国立大学法人における教養教育に関する実態調査」。

看護学教育の在り方に関する検討会，2004「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」報告，<http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf>。

中教審答申，2002「新しい時代における教養教育の在り方について」。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020203.htm。

高等教育開発推進センター自己点検・評価委員会，2007「九州大学全学教育－学生による授業評価（平成19年度前期）のデータ一覧」。

九州大学医学部保健学科，2008「平成19年度保健学科専攻教育科目学生による授業評価」。

文部科学省高等教育局，2008「保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部を改正する省令の公布について」。

櫻井利江・浅野美礼, 2007「教養教育を礎とする基本看護技術演習－プログラムの開発指針と今後の課題－」, 看護研究, 40 (1), 11-19頁.

有本章 (代表者), 2005「大学設置基準の大綱化に伴う学士課程カリキュラムの変容と効果に関する総合的研究」, 平成10年度～平成12年度文部科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (1)) 研究成果報告書.

九州大学教育改革企画支援室, 2008「九州大学卒業生の大学教育に関するアンケート」について (集計結果報告).